

看護学生と一般学生の死生観の比較

キーワード：看護学生、一般学生、死生観

○渡辺由佳¹⁾、小林祐子¹⁾
新潟青陵大学¹⁾

I. 目的

看護学生だけではなく、これから身内の死を経験していく青年期の学生にとって死生観を形成していくことが必要である。そこで、本研究では看護学生と一般学生の死生観の比較とその影響要因を明らかにし、青年期の学生が死生観を形成することの必要性を検討する。

II. 方法

対象はA大学看護学科4年生76名、B短期大学人間総合学科人間総合コース2年生114名の合計190名。性別、死別経験・信仰の有無、死を考えるきっかけを質問した。看護学生には、終末期患者の受け持ちの有無を追加項目とした。死生観尺度は7因子27項目で構成されている臨老式死生観尺度(7件法)を使用した。死生観による比較はt検定を行い算出した。有意水準は $p < .05$ 値とした。

調査協力は自由意思によるものであり、質問紙は無記名で個人が特定されないこと、参加・不参加に関係なく学業や成績等に不利益が生じることがないこと、得られた結果は本研究のみで使用することを口頭と文書で説明を行い、アンケート用紙の回収をもって、同意が得られたものとした。

III. 結果

看護学生64名(回収率84.2%)、一般学生105名(回収率93.8%)を分析対象とした。

1. 対象の属性

看護学生の中で終末期患者の受け持ちの経験がある学生は53.1%、経験がない学生は46.9%であった。死別経験は、看護学生あり96.9%、なし3.1%、一般学生あり93.3%、なし6.7%であった。死別者との関係では、看護学生、一般学生ともに祖父母が多かった(複数回答)。看護学生で受け持ち患者の死を経験した人は、4名であった。複数回答による死を考えるきっかけとなったものは、看護学生、一般学生共に人の死が多く、次いでドラマであった。その他、震災も多く見られた。

2. 死生観の比較

看護学生と一般学生の死生観尺度の平均値を比較したところ、「解放としての死」では看護学生の方が有意に高かった($p < .05$)。有意差は見られなかったものの、「死への恐怖・不安」が看護学生では4.54、一般学生では4.78と7因子の中で最も高く見られた。死別経験の有無による比較では、「死からの回避」、「死への関心」が死別経験のある学生が有意に高く、「寿命感」では死別経験のない学生が有意に高かった。信仰の有無による比較では、「人生における目的意識」、「寿命感」が信仰のある学生に有意に高かった。看護学生の終末期患者の受け持ち経験による比較では、「人生における目的意識」が受け持ち経験のある学生が有意に高く、「寿命感」では経験のない学生が有意に高かった。

IV. 考察

看護学生の死を考えるきっかけとなったものは人の死が74.6%であり最も多く見られた。講義は34.9%であり、授業や実習を通して生と死の場面に出会う機会が多く、考えるきっかけのある看護学生の方が「解放としての死」が高くなった。また、看護学生の半数

が終末期の患者を受け持ち、身近な人の死を経験している学生が一般学生より多く見られ、死を身近なものとして捉えているため、このような結果が得られたと考える。有意差は見られなかったものの「死への恐怖・不安」が一般学生は看護学生に比べて高かった。一般学生は看護学生に比べて死について学び、考える機会が少ないため、マス・メディアからの一方的な情報によって死というものを解釈してしまっていると考えられる。

看護学生は死を迎える人と同時にその家族も看護する必要があるため、学生のうちから死生観を形成していくことは重要である。青年期は、自分はどういう人間であり、これからどのように生きていくのかという問いに向き合うアイデンティティの確立の時期である。今後は、青年期にある人たちが死に遭遇することが増えてくる。その時に、死を避けることのないよう、きちんと向き合えるように死生観を形成しておくことが必要である。災害が身近に起こっている現在、死に直面することは先のこととは言い難い。また、若者の自殺が多い現代、生きることの意味を考えて向き合うことが大切である。

糸島は看護学生と大学生の調査から、「生と死を考える授業は、各年代で行うことにより、死生観を形成する上で強い印象を残すことが期待できる。」¹⁾と述べている。本研究では、死を考えるきっかけとなったものとして、看護学生では講義が多くセミナーの影響も見られた。一方、一般学生では講義、セミナーがほとんど見られなく、看護学生と比較して教育の一環として考える機会は少ないと考えられる。大学では分野によって学ぶ内容は異なるが、生と死について学ぶことによって自分の人生における目的もはっきりすることができるのではないかと考える。したがって、青年期に継続していのちの教育を行い、死生観を形成していくことが必要である。

V. 結論

看護学生と一般学生の死生観とその影響要因を検討し、以下の結果を得た。

1. 看護学生は一般学生と比較して死を「解放としての死」として捉えており、一般学生は死を「死への恐怖・不安」と捉えていた。
2. 死への影響を与えた要因として、先行研究同様に人の死、ドラマが多く見られた。その他の要因として震災の影響も見られた。
3. 看護学生だけではなく、一般学生も同様に継続的にいのちの教育を行う必要性が示唆された。

引用文献

- 1) 糸島陽子. 死生観形成に関する調査—看護学生と大学生の比較—. 京都市立看護短期大学紀要. 2005. 30. 141-147.